

愛知川の水害

愛知川は、私たちの生活にたくさんの恵みを与えてくれますが、ときとして、自然の猛威を見せつけることがあります。

水害がそれです。急な増水に耐えきれないで、堤防が決壊し、田畑や住宅を襲い、住民を苦しめてきました。

いまも治水事業は大きな課題です。

明治29年(1896)9月の水害

いまからちょうど100年前のこの年は、8月までに1年分の雨量があったうえに、9月3日から12日間豪雨が降り続き、琵琶湖の常水位を3メートル以上も上回る驚異的な水位(県の記録は3.76メートル)を記録しました。

この大豪雨で滋賀県全域に被害が出て、湖岸の村落や田畑は水没したり流失しました。琵琶湖から流れ出る瀬田川に、まだ南郷洗堰がなく、水量調節ができなかったため、水位がもとに戻るまで8カ月もかかったそうです。

昭和13年(1938)8月2日、9月5日の水害

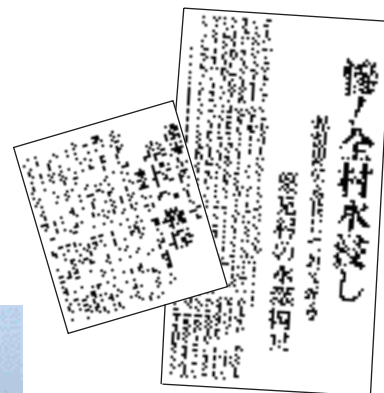
福堂付近の愛知川堤防が200メートルあまり決壊し、旧栗見村(現在の北小学区)全体に浸水し孤立しました。仮堤防ができた後、再び決壊するという二度の被害を受けました。「栗見全村が、水深4尺(約1.2m)浸水したため、村内の子どもは全部伊庭村のきぬがさ小学校へ避難し、大人のみとどまって復興に努めた。文字通り水地獄げんじゆつを現出している」と、当時の新聞が報じています。



決壊した堤防は、村人たちの総出(きせ)と近隣の村からの多くの応援を得て復興されました(昭和13年9月撮影)。



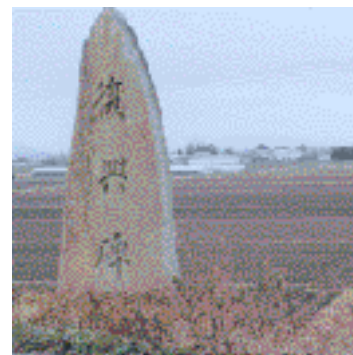
小川にある八宮赤山神社の浸水碑



当時(昭和13年)のようすを報じた「大阪毎日新聞」の記事



昭和13年、堤防は決壊し、田畑は海と化しました。



現在、福堂の堤防には復興碑が建てられています。

昭和28年(1953)9月25日 — 台風13号による水害

愛知川の堤防が神郷と福堂付近で決壊し、あふれた水が大中の湖に入り、さらに、小中の湖干拓地の中洲と須田の堤防を破壊して浸水したため、干拓地はもとの湖のようになりました。



▶もとの湖のようになった中洲地区



◀小中の湖の堤防が決壊したため、田畑は冠水しました。少しでも収穫を願う人たちは、水面に浮かぶ稲穂を田舟で刈りました。

平成2年(1990)9月19日 — 台風19号による水害

今地先と栗見新田付近の愛知川堤防が決壊し、収穫中だった水田や住宅に大きな被害が出ました。また日本電気硝子の大駐車場も直撃を受け、たくさんの車が流され、犠牲者も出ました。この会社やまわりの工場も浸水のため一時操業ができなくなりました。



▲堤防の決壊で、駐車場の車が100台余り流されました。

◀田畑や道路まで冠水し、一面海と化し、集落も孤立しました。



◀愛知川の治水対策は、いつの時代でも多くの費用と労力が必要でした(栗見橋から下流を望むところの護岸工事も完成し、河川敷には「ふれあい運動公園」も整備されました)。